

---

# 連続女性失踪事件

ともゆき

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

連続女性失踪事件

### 【コード】

N0039A

### 【作者名】

ともゆき

### 【あらすじ】

東京で起きた連続女性失踪事件と突然失踪した巴の姉。果たして2つの事件の共通点は？

(第1話)

10月のある日の御神楽探偵事務所。

「…只今」

鹿瀬巴、久御山滋乃、桧垣千鶴の3人が事務所に戻ってきた。

「お帰りなさい」

そんな3人を蘭丸　　ランドルフ丸山が出迎える。

「はあっ…」

巴が大きいため息を吐くと自分の机に座った。

「…その様子だと、手懸りは何も無かったようですね」

この事務所の所長である御神楽時人が聞いた。

「…はい。聞き込みをしてもこれといった情報は無かったし…」

「本当ですね。一体どうしたんでしょうか…」

この1ヶ月の間、東京で何人もの女性が行方不明になっている、  
と言う事件が発生していた。

御神楽探偵事務所にもそういった依頼が何件か来ており、彼らは  
手分けして捜査を進めているのだが、相手は慎重にコトを進めてい  
ると見えて、全くと言っていいほど手懸りが掴めていないのだった。  
たまに情報が入ってくるとしてもそれは断片的なものばかりでと  
てもじゃないが事件解決に結びつくようなものではない。

時人もこれまでに何度か警視庁に足を運び、諸星警部や栗山刑事  
と情報交換を交わしていたのだが、警視庁の方でもなかなか手懸り  
がつかめていない、ということだった。

\*

そんなある日のことだった。

「諸星警部の所に出かけてくる」という時人を送り出してから作戦  
会議を巴たち三人がしていたときだった。

不意に事務所のドアをノックする音が聞こえた。  
ドアの方に注目する巴たち。

「…なんでしょう?」

「依頼人でしょうか?」

「ちよつと見てくるね」

そして巴が事務所のドアを開ける。

「…あの、すみません。ちよつと今、先生出かけてるんですけど…?」

そう言う巴の視線の先には誰もいなかった。

「…?」

慌てて辺りを見回す巴。ふと、視線を斜め下にやると…

「あ…」

そこには二人の少年が立っていた。一人はまだ10歳に満たない少年であり、もう一人は5〜6歳の少年であった。どうやら兄弟のようだ。

と、兄らしき少年の方が

「…巴お姉ちゃん…」

その少年の顔を見て思わず絶句する巴。

「…忠、良平! どうしたの?」

「うわああああん!」

いきなり少年が泣き出した。

「ちよ、ちよつと待って! ほら、中に入ろう!」

\*

事務所に入れ、来客用のソファに二人を座らせた巴は千鶴と滋乃に二人を紹介した。

二人の少年は兄の方が忠、弟が良平といい、巴の下のほうの弟だ、と言う。

「…巴さんの弟さんなんですか…」

「そうなのよ。…それよりあんたたち一体何しに来たの?」

「…その、光枝お姉ちゃんを探して欲しいんだ」

「光枝お姉ちゃんを？ ……一体光枝お姉ちゃんがどうしたの？」

巴は何人かいる自分の姉の中で自分のすぐ上の姉の顔を思い浮かべた。

「その…1週間前に東京に行っただつきりなんだ」

「…え？ そんなの聞いてなかったわよ。私に一言言ってくれればいいのに…」

「それが急に家を出て行っちゃって…」

「急に？ ……いったいどういうこと？」

巴が驚いて聞き返す。

以下、忠と良平が話したこととは…。

今から一週間ほど前、巴の姉である光枝が家に帰ってくるなり「明日から急な用事が出来たので東京に言ってくる」と言った、という。

両親や弟達は何故急にそんなことになったのか、と聞いても「友達に呼ばれた」としか言わず、それ以上のことは言わなかったという。

「2、3日したら帰ってくる」と出発前に言ったのだが、いざ東京に行ってしまうと何の連絡もよこさず、当然2、3日たっても帰ってこず、ついに1週間が過ぎてしまった、と言うことだった。

「変ねえ…。東京に行く、って言うなら、私の所にも一言も連絡があっただっていいのに…」

「巴お姉ちゃんにも連絡無かったの？」

「うん。…でもさ、お姉ちゃん本当に友達の所に行ってるのかもわからないわよ。それで単に連絡を忘れてるだけじゃない？」

「だからと言って、一週間も連絡をよこさないなんて変だよ！」

「そりゃそうだけど…」

「…鹿瀬さん。その鹿瀬さんのお姉様、って方、今までそういう、どこかに出かけて連絡をよこさない、何てことあったんですの？」

滋乃が巴に聞いた。

「…ううん。そんなことは今まで無かったんだけど…」

「…だとしたらちよっとおかしいですね…」

千鶴が言う。

「そうだよ！ 光枝お姉ちゃんが連絡を一週間もよこさないなんて変だよ！ だから光枝お姉ちゃんが何か大変なことになったんじゃないか、って思ってたさ。…それで巴お姉ちゃんが東京でたんていさん、って言うのやってるから、巴お姉ちゃんなら探してくれるんじゃないか、って思ってたんだ…」

「…それにしてもよくここがわかったわね…」

「…うん。上野駅で銀座が何処にあるのか教えてもらって、銀座でその、お姉ちゃんがいるたんていさん、っていうのが守山ビル、って所にいる、って聞いて守山ビルに来たら、この下にいる女の人が、こここの二階だ、って言うってたから…」

「…じゃあ、美和さんも知ってるのね。後でお礼言つとかないと…」

「美和さんにはいつもご迷惑かけっぱなしですね」

「…それで、あなたたち、お母さん達はこれ知ってるの？」

巴が聞くと、

「それが、その…」

急に黙り込んでしまった。

「どうしたの？」

「…父ちゃんや母ちゃんたちに黙って出てきたんだ」

「なんですってえ？」

思わず目を丸くする巴。

「だって、巴お姉ちゃんのところに行く、っていったら絶対父ちゃんや母ちゃん反対すもん。だから黙って出てきちゃったんだ」

「じゃあ、お母さん達はあなた達がここに来たこと、ぜんぜん知らないってわけ？」

二人がうなずいた。

「全くあなたたちは…。一体誰に似たのかしら？ そりゃあ、お姉

ちゃんだつて光枝お姉ちゃんの事が気になるけど、お姉ちゃん達今、他のお仕事があるのよ。とてもじゃないけど……」

「あの、巴さん。弟さんたちが困つてると言うのにそういう態度は無いんじゃないんでしょうか？」

千鶴が言う。

「でも……」

「……一体どうしたんですか？」

いつの間に戻ってきたのだろうか、時人が話の輪の中に入ってきた。

「あ、先生。お帰りなさい」

「……この子達は？」

来客用のソファに座っている二人の少年に気づいた時人が聞いた。

「巴さんの弟さんらしいんです」

「鹿瀬くん……、ですか？」

「それですね……」

千鶴はこれまでの話をかいつまんで説明した。勿論、巴の姉が東京へ出て行ったきり、一週間も帰ってきていないことも。

その話を聞いた時人は、

「……うーん。確かにその、鹿瀬君のお姉さんが突然東京に行つてしまつて連絡もよこさない、というのは妙ですね……」

「先生……」

「……いや、今僕達が調べている事件と関わりがあるのかどうかは断定できませんが、一応調べておいたほうがいいでしょう。諸星警部にも僕のほうから話しておきますよ」

「それじゃ、先生……」

「……そうですね、こんな子供でも僕達にとっては依頼人に変わりはありません。その仕事、お引き受けしましょう」

時人の言葉に巴は一つため息を吐くと、

「……わかつたわ。じゃ、光枝お姉ちゃんは私たちが探してあげるから、あんた達はもう帰りなさい」

「それが…、もうお金ないんだ」  
「え？」

「ボクたちの持ってたお金だここに来る切符だけで全部使っちゃって…」

「そんなこと言ったって…、お姉ちゃんだってお給料日前だからそんなに持ってないし…」

「…鹿瀬さん、よろしければ運賃くらいならわたくしが立て替えてあげますわよ」

滋乃が言うが、

「…久御山さんにまで迷惑はかけられないわよ。どうしようかなあ…」

「…それじゃこうしましょう。しばらく彼らは僕の所のお客として置いておきましょう」

「でも…」

「折角はるばる長野から来たんですから…、ついからですから東京見物でもさせてあげましょうよ。ね、それでいいでしょう？」

「わかりました。先生が言うなら…。忠、良平」

「なに？」

「ちゃんと先生のいうことを聞いていい子でいるのよ！ それからお母さんにはお姉ちゃんの方から連絡しておくからね」

\*

「…うん。そういうわけで、しばらくこっちで預かっておくから。」

「ごめんね、お母さん」

そう言つと巴は電話を切った。

「ふう…。お母さん怒ってたわよ。勝手に抜け出すなんて。おかげでお姉ちゃんまで怒られちゃったんだからね」

巴が二人の弟に言った。

「まあまあ、いいじゃないですか、鹿瀬君。彼らはしばらく僕と蘭丸君で面倒を見ますから、安心してくださいよ」

\*

翌日。

「おはようございます」

巴が事務所のドアを開ける。

「…?」

思わず目を丸くする巴。

なんと事務所の来客用のソファで時人が、毛布をかけて寝ていたのだった。

「…あ、おはようございます。鹿瀬君」

巴がドアを開けたのに気づいたか、時人が目を覚まして挨拶をする。

「おはようございます。巴さん」

台所から蘭丸が顔を出した。

「…一体どうしたんですか?」

「あ、これですか。いや、忠君と良平君には僕のベッドで寝てもらっているだけです」

「…だから昨夜私が、自分のアパートに連れて帰る、って行ったのに…」

「いいじゃないですか。僕のお客さんなんですから。あ、それでですね」

「なんですか?」

「今日、僕と蘭丸君は忠君たちを連れて浅草見物に言ってきましたんで」

「…え?」

「大丈夫です。鹿瀬君たちはいつも通りに調査をして、後で報告してくればいいですから」

「…はあ。…本当に先生、ってこういうのが好きだから…」

「何か言いましたか?」

「い、いえ。何も」

\*

そして、時人たちは巴たちが調査に出かけるより先に事務所を出

て行った。

…が、時人はそのまま浅草へとは行かず、何故か警視庁の方へと向かって行った。

「あ、先生」

時人の姿に気づいた栗山刑事が時人に近付いてきた。

「…諸星警部はいますか？」

「ええ、いますよ。…警部！」

栗山刑事が時人を呼ぶと、程なく諸星警部がやって来た。

「お、先生。…今日は何の用だ？」

「いえ、ちょっとお願いしたいことがあって」

「…わかった。応接室を開けとくぜ」

「いつもすみません。…それじゃ栗山刑事。しばらく蘭丸君たちと一緒にいてくれませんか？」

「え？」

「いいじゃねえか、すぐ終わるぜ」

「…それじゃ蘭丸君、お願いしますよ」

「はい」

\*

応接室。

「…そうか…。鹿瀬のお嬢ちゃんの姉さんが…」

時人から巴の姉が行方不明になっているという話を聞いた諸星警部はそう言った。

「ええ。長野から弟さん達がわざわざ来て、探して欲しいと言ってるんですよ」

諸星警部はちょっと考えると、

「…わかった、一応調べておこう。名前は鹿瀬光枝でいいんだな？」

「よろしくお願いします」

「なあに、他ならぬ御神楽先生の頼みだからな。それから、後で鹿瀬のお嬢ちゃんに搜索願出すように言っとけよ。そうでないところ」

ちも大つぴらに動けねえからよ」

「わかりました」

「…そういえばな、先生」

「何ですか？」

「実はな、最近似たような事件が隣県の県警からも報告されてるんだよ」

「何ですって？」

「ああ。いずれの事件も共通してるのは、若い女性が東京や横浜に行く、と言って家を出たきり戻って来ないらしいんだ。いずれも『2、3日で戻ってくる』と言ってのに何日経っても戻ってこない、というのまで一緒だ」

「…じゃあ、鹿瀬君のお姉さんも…」

「かもな。それでよ、先生」

「何でしょうか？」

「…オレの勘なんだけどな。この事件、なんだか背後にそういった、人身売買組織みてえなのが関係してるんじゃないか、と思うんだけどな」

「…そうかもしれませんね。この一ヶ月で同じような形で大勢の女性が行方不明になってるなんて…」

「…とにかくな、オレはそっちの方をちょっと調べてみようと思ってるんだ」

「そうですね。でも警部、この事件、まだ何もわからないも一緒に。僕の方も調べてみますけど、くれぐれも慎重にお願いしますよ」  
「わかってる、って」

(第2話に続く)

(第1話) (後書き)

(作者より)この作品は作者の開設している「ともゆきのホームページ」が「小説家になろう」のNW・SYSTEMを使って掲載しています。採点システムは採用していません。

この作品の感想等は「ともゆきのホームページ」のBBSの方にお願ひします。

(第2話)

諸星警部の勧めで巴が姉・鹿瀬光枝の搜索願を警視庁に出したの  
は時人が諸星警部と情報交換をした翌日だった。

そして、その日の午後のことだった。一人の女性が御神楽探偵事  
務所にやってきた。

蘭丸にお茶を運ばせ、巴の弟たちの面倒を見るように伝えた後、  
時人は来客用のソファに座った。

「妹の行方を捜して欲しいのです」

その女性はいきなりこう切り出した。

「妹さんを？」

時人が聞き返す。

その女性 古久保幸子と名乗った が話すところによると、  
彼女の妹・古久保彰子は3日ほど前から行方不明となっており、行  
方を捜して欲しい、と言うのだった。

「その、妹さんの行方に心当たりはないのでしょうか？」

時人が言う。

「…心当たり、といわれても…。ただ…」

「ただ？」

「妹が行方不明になる前日にちょっと気になることがあって…」

「気になること、といいますと？」

「ええ。妹が何やら出掛ける準備をしてたんです。そして次の日に  
出掛けてから…」

「行方不明になった、と言うわけですか」

「はい」

「うーん…」

時人は黙り込んでしまった。

「…どうかなされましたか？」

「いえ、ちょっと気になりますね。いえ、古久保さん。ご存知でしょうか？　ここ最近、この東京や近県で同じような事件が起こってるんですよ」

「噂には聞きましたけど…。そんなことって本当に？」

「いえ、僕の知り合いの刑事から聞いた話なんで、僕自身は何とも言えないんですが…。その辺の関連も調べる必要があるみたいですね」

依頼人が帰った後のことだった。

「…先生…」

巴が時人に話しかけた。

「…どうやら、僕たちが考えている以上にこの事件は大きくなりそうですね」

「…やはり組織か何かが関係してるのでしょうか？」

千鶴が言う。

「諸星警部もそう睨んでいるようなんですがね。ただ、組織が相手となると向こうの手の内が読めない限りこっちとしてもどうしようもないんですが…」

その時だった。

「あ、お邪魔だったかしら？」

不意に事務所に守山美和が入ってきた。

「あ、いえ。美和さん、何か御用ですか？」

「…実はさつき、用があつて出かけてたんですが、その時にこんな名刺をもらつて…」

と、美和が名刺を差し出した。

「東京モデル紹介所　所長　藤谷充博」

とだけある名刺だった。

「東京モデル紹介所？ …聞いたことありませんね…」  
「大体美和さん。この名刺何処でもらったんですか？」  
巴が聞く。

「いえ、ちよつと用があつて友人の家に寄つた帰りに呼び止められて、この名刺をもらつたんです」

「ふーん…」

そう言うと巴は名刺をまじまじと見つめる。

「なーんか名刺だけで十分怪しいわよね…」

「…あの、時人さん」

「なんですか？」

「…実は、私、この人達に会つてみようかと思つてるんです」

「え…？」

思わず絶句する時人。

「…なんでですか？」

「いえ、巴さんのお姉さんもそのようですけど、皆さんが今扱つて  
いる事件の行方不明になつていいる女性、というのが何でも道で声を  
掛けられ、出かけたきり行方不明になつた、という話でしたよね？」

「え、ええ…」

「もしかしたら今回の事件と何か関係があるのではないか、と思つ  
て…。皆さんの捜査のお役に立てればいい、と思つて…」

「でも…、そんな危険なことを美和さんにはさせられませんよ！」

時人が言う。

「そうですね、こんな危険なことは私たちに任せた方が…」

千鶴が言うが、

「でも、もし皆さんが探偵だとわかつたら、相手がどのような行動  
に出るか解りませんよ。その点私は皆さんより顔が知られてないし  
…」

「でも…」

「危険は十分承知してます。でも時人さん『虎穴に入らずんば虎兇  
を得ず』ですよ。これで犯人に一步でも近付くことが出来ればいい

んじゃないんですか？」

「うーん……」

時人が腕組みをする。

確かに美和の言うこともわかるのだが、だからといって美和は自分達とは直接関係のない人物である。そんな人物を危険な目にあわせていいものなのだろうか？

\*

その翌日のことだった。

「それじゃ、先生。行ってきます」

蘭丸が時人に挨拶をする。

結局、美和は探偵事務所の面々が反対するのを押し切って、自らおとり捜査を買って出ることになったのである。

とはいえ、どんな危険な目に遭うかわかったものではない、そう判断した時人はおとり捜査に協力してもらおう条件として探偵事務所から一人ボディガードをつけることにしたのだ。で、誰をつけるか、と言うことになったのだが、最初は巴が自ら立候補したのだが時人が「鹿瀬君たちは被害者に年齢が近いから一体どうなるかわからない」と言うことで却下し、蘭丸が選ばれたのである。ま、確かに蘭丸は男ではあるが体つきが華奢だから少々頼りないボディガードではあるが。

そして蘭丸と美和は守山美術の前で落ち合った。

「それじゃ美和さん、行きましょうか」

蘭丸が言うと美和は軽く頷いた。

「名刺に書いてある住所だとこのあたりなんだけど……」

美和が言う。

「美和さん、あれじゃないですか？」

蘭丸が指差す。

その先には3階建ての建物があり「二階・東京モデル紹介所」と

言う紙が貼ってあったのだ。

「…どうやらあの建物の二階のようね」

美和が言う。

「そうですね」

「…蘭丸君、ここからは私ひとりで行かせて」

「え？ でも…」

「蘭丸君がいたら怪しまれるわ。だからお願い」

「わ…、わかりました」

そして美和は中に入っていった。

それを見届けた蘭丸は何を思ったか地面に転がっている石を2、3個拾うと美和に気づかれないうちにゆっくりと中へと入っていった。

\*

(…ここか…)

蘭丸は「東京モデル紹介所」と看板があるドアの前に立っていた。

(…どう考えたって怪しいよなあ…)

蘭丸はそつとドアのノブに手を掛けた。

音もなくスツとドアが開いた。

指一本はいる程度の幅程度に開いたただけだが蘭丸も御神楽探偵事務所の一員。これくらいの幅があれば十分の広さである。

蘭丸はそつと中をのぞいた。

中では美和が茶を一口すすっていた。

どうやら美和はソファに座っており、誰かと話をしているようだった。

声を聞いていると男のようだった。

美和のことを気に入っただのか盛んにモデルにならないか、と勧めているようだった。

勿論美和だって本気にするわけではないから適当に聞き流しているようだったが。

それからしばらく経ったときだった。

急に美和が頭を抱えた。

「…どうかしましたか？」

男の声がする。

「いえ、何だか急に眠くなって…」

「…そうですね。じゃ、一寸横になってていいですよ」

「すみません」

そして美和は横になった。

と、男が美和の近くに寄った。

男が美和の頬を叩く。

「…ふん、どうやら薬が効いているようだな」

（…薬だつて？）

外で見ていた蘭丸はそれを聞いて驚いた。

つまり美和は睡眠薬を飲まれた、ということだろうか？

「この女、なかなかの上玉のようだな。…どれ、じゃ、品定めとい  
くか。」

男は美和の服に手を掛けた。

（…美和さん！）

もつつべこべ言ってる暇はない。蘭丸はドアを開けて中に入った。

「な…、何だてめえは！」

男が叫んだ！

「美和さんに触るな！」

「なんだと！ このガキヤ！」

男が蘭丸に襲い掛かった。

しかし蘭丸が次に起こした行動はすばやかだった。

ポケットからさつき拾った石を取り出すと男に向かって投げつけた。

この思いもかけない攻撃に男がひるんだ。

「残念だったね。ボクはただのガキじゃないんだ！」

蘭丸の体にはまだ浅草で浮浪児だった頃の血がどこかに流れているようだ。だからこういう時のやり方を体が覚えているのだろう。

「…この野郎…」

そういうと男は机の中から拳銃を取り出した。

(い……)

まさか相手が拳銃を持っているとは蘭丸も予想しなかった。

「ガキだから、って容赦はしねえぞ。てめえからぶっ殺してやる」

その時だった。

「そこまでだ！ 手を上げろ！」

ドアの外で声がした。

思わずドアの方を見る男と蘭丸。

「諸星警部！」

蘭丸が叫ぶ。

そう、ドアの外には諸星警部と栗山刑事が拳銃を構えて立っていたのだ。

そしてその後ろには数名の警官に混じって巴たちも立っていた。

巴も懐中鉄砲を構えていた。

男もさすがに観念したのか両手を挙げた。

それを見届けた諸星警部たちは部屋の中に入り、男を身柄を確保した。

「蘭丸君、大丈夫？」

千鶴が聞いた。

「え、ボ、ボクは大丈夫ですけど、美和さんが…」

「美和さん、美和さん！」

巴が美和が横になっているソファに近付き、美和に呼びかけた。と、美和が目を開けた。

「…巴さん、どうしたんですか？」

「どうしたもこうしたも…、美和さん大丈夫ですか？」

「え、ええ、私は大丈夫ですけど…、何故ここに？」

「いや、先生からこういうわけで、って連絡があつてな。もしかしたら、と思つてお嬢ちゃんたちと一緒に来てみたら…、ってわけだよ」

諸星警部が替わりに答えた。

「そつ、時人さんが…」

と、いきなり美和が頭を抱えた。

「うっ…」

「美和さん！」

慌てて駆け寄る巴。

「いえ、一寸頭がぼうつ、とするだけだから…」

「美和さん、睡眠薬か何か飲まされたようなんですよ」

蘭丸が言つ。

「本当？」

「ええ…」

とりあえず美和のこと蘭丸に任せて、男が連行されるのを見届けた諸星警部と巴たち3人は家宅搜索を始めた。

その時だった。

「鹿瀬さん、松垣さん。ちよつと！」

滋乃の声がした。

「どうしたの、久御山さん？」

巴と千鶴が滋乃の下に来る。

滋乃は何やら棚のようなものを調べていたようだが、その中から1冊のアルバムを引っ張り出し、

「…これ何なんですの？」

「何、つて？」

滋乃はアルバムを二人に見せた。後ろから諸星警部が覗いている。見ると何処かの街角で撮影したのか、女性の顔写真が何枚も張つ

てあったのだ。

「随分と女性の写真がありますね……」

「これがどうかしたの？」

巴が聞く。

「この写真を見てくださらないこと？」

と滋乃が一枚の写真を指差した。

「……これは……」

その写真を見た巴、千鶴、そして諸星警部の3人は言葉を失った。

「……この人は……」

「そうですね、例の失踪事件でわたくし達が依頼を受けた行方不明の女性のうちのひとりですわ！」

「……ということは……」

「もしかしたら何か手懸りがあるかもしれないですね……」

「探してみようよ！」

そして4人は手分けしてあちこちを探していた。……と、

「みんな、一寸来て！」

巴が何かを見つけたか、滋乃たちを呼んだ。

何ごとか、と蘭丸や美和も含む全員が巴のもとに集まった。

「どうしたんですの？」

「これ、なんだろう……」

巴が一枚の紙を差し出した。

それにはこのように書かれてあったのだ。

王除二	明除月	液除水	丸除点	寺加日	木加黄
兵加水	巷加水	亭加人	白加水	忠除心	百除一
襲除衣	九加点	肉除人			

「……なんででしょう？」

「何か、漢詩のようですわね」

「でも、何だか全然意味がわからないよ……」

「とにかく、何か手懸りがありそうだな。…とにかく、これは持ってた方がいいな」

「でも警部……」

「心配するな。写しは取っておく」

(第3話に続く)

(第2話) (後書き)

(作者より)この作品は作者の開設している「ともゆきのホームページ」が「小説家になろう」のNW・SYSTEMを使って掲載しています。採点システムは採用していません。

この作品の感想等は「ともゆきのホームページ」のBBSの方にお願ひします。

(第3話)

「…どうでしょうか、先生？」

御神楽探偵事務所。諸星警部からもらった紙の写しを時人に見せて巴が聞く。

「うーん…」

時人は腕組みをしてじっとその紙を見ていた。

「…なにやら漢詩のようには見えませんが、漢詩とは一寸違うようですね。これだけじゃどういう意味かまったくわかりませんよ」

「そうですね…」

「でも、その紹介所にいた人物が持っていた、ということは何か意味があるはずなんですよ」

「じゃあ先生は…」

「はい。おそらく暗号か何かじゃないか、と思えるんですが…」

「暗号ですか？」

「ええ。もしその紹介所が組織となんらかの関係があつたとしたら、この文章も絶対に何か意味があるはずなのですが…」

そう言つと時人はまた黙ってしまった。

「とにかく、この事件はまだわからないことが多すぎます。本当にそういう組織があるのかも…。とにかく、鹿瀬君達もこれの写しをとって置いてそれぞれで持っていて下さい。何かわかつたことがあつたら連絡をお願いしますよ」

「はい」

\*

夜。あるアパートメントの一室。

巴はちゃぶ台の上に置いてある紙をさつきから見ていた。

王除二 明除月 液除水 丸除点 寺加日 木加黄  
兵加水 巷加水 亭加人 白加水 忠除心 百除一

襲除衣 九加點 肉除人

一体この文章の何処に秘密があるというのだろうか？

確かに漢詩にしては意味がまったく通用しないし、それぞれが3文字ずつでまとまっているのも気になる。それにやたらと「除」「加」という字が多い、ということも…。

「…一体どういう意味があるんだろう…」

その時だった。

「あ…」

巴の脳裏にこれまでとは別の視点が浮かび上がったのだ。

「まさか…」

そして巴は鉛筆と紙を取り出して何かを書き始めた。

「…これだ…」

そして巴はしばらく何かを考えていたが、

「…先生、ごめんなさい！」

そう呟くとアパートメントを出て行った。

\*

夜中。

巴はある場所に來ていた。

そしてフレアスカートの中から隠し持っていた懐中鉄砲を取り出す。

「…ふうっ…」

大きく一回深呼吸をするとゆっくりと扉を開ける。

自分が想像していた以上に大きな音がし、巴は一瞬焦ったが、幸いにも中に誰かがいる、という様子は無いようだった。

「お姉ちゃん！ 光枝お姉ちゃん！」

巴の声がこだました。

巴は慎重に歩を進め、中に入っていった。

そのときだった。

巴の後頭部に何か固く、冷たい筒のようなものが押し当てられた。

\*

「おはようございます」

そう言っつて滋乃が事務所に入ってきた。

「あ、久御山さん、おはようございます」

そう言いながら千鶴が近付いてきた。

「…？」

事務所で出迎えた顔ぶれを見て滋乃は何か違和感を覚えた。

「…鹿瀬さんはどうしましたの？」

そう、いつもだったら自分より早く来ているはずの巴がいない、

事務所を出迎えたのは千鶴と蘭丸の二人だったのだ。

「巴さんならまだ来ていませんけど」

蘭丸が言う。

「何か連絡はありましたの？」

「いえ、それがまだなんです」

「今日は『山茶花』の方は定休日ですから、そちらのほうに行くはずはありませんわよね…」

「…僕もそれが一寸心配で。今から桧垣君と二人で鹿瀬君のところに行こうかと思ってたんですよ」

そういいながら時人が所長室から出てきた。

「あ、時人様。それじゃわたくしも一緒にしますわ」

「わかりました。蘭丸君は鹿瀬君から連絡があるかもしれないですから、ここで待っていて下さい。それと忠君と良平君の世話もお願いしますよ」

「わかりました」

\*

そして時人、滋乃、千鶴の3人は巴が住んでいるアパートメントの前に来た。

そして階段を上がっていく。

「鹿瀬君、鹿瀬君！」

そう言いながら時人は巴の部屋のドアをノックする。

しかし、中から反応はない。

「鹿瀬さん、おりませんの？」

今度は滋乃が聞いた。

しかし反応はない。

「…どうしたんでしょうか？ 中から何も返ってこないなんて…」

千鶴が聞く。

「うーん、気になりますね…。 桧垣君、確か1階に管理人室があり

ましたよね」

「はい」

「管理人さんに頼んで鍵を借りてきてください」

「わかりました！」

そして2、3分経ってから千鶴と一人の五十〜六十歳台の男がやって来た。このアパートメントの管理人ということだった。

時人は管理人に事情を話し、管理人に巴の部屋を開けてもらった。

「鹿瀬君」

3人が入ると部屋の中には誰もいなかった。

「…誰もいませんね…」

「鹿瀬さん、何処に行かれたのかしら？」

「…おそらく、昨日の夜、どこかに出かけて、それっきり戻ってませんよ」

時人が言う。

「どうしてですか？」

「押入れを見てください」

そう言って時人はいつの間にか開けたのだろうか、押入れを二人に見せる。

「布団がきれいにしまわれているでしょう？　ということは鹿瀬君は昨夜これを出してはいない、ということですよ。つまりこれは昨夜、探偵事務所から直接、若しくは一度ここに戻ってきてからそれ程時間をおかずにどこかへ出かけた、ということですよ」

「それじゃ鹿瀬さんは…」

「いえ、軽々しい判断は出来かねますが…、鹿瀬君に何かなければいいんですが…」

\*

そして3人は事務所に戻った。

「あ、先生」

蘭丸が時人に近付いてきた。

「…鹿瀬君から連絡がありましたか？」

「いえ、全然ありませんが…。巴さん、どうかしたんですか？」

「実はですね…」

と時人は忠たちに余計な不安を与えないように、と思ったのが、蘭丸に「鹿瀬君が行方不明になった」と耳打ちをした。

「…まさか…」

「いえ、まだ詳しいことはわからないんですが…。蘭丸君、忠君たちに余計な不安を与えたくはないので、このことは二人には黙っててくださいよ」

「…わかりました」

その時だった。

「こんにちは」

一人の女性が御神楽探偵事務所にやって来た。

「あ、古久保さん」

千鶴が言う。

そう、その女性は時人に「妹の行方を捜して欲しい」と依頼してきた古久保幸子だった。

蘭丸がお茶を持ってきて、古久保幸子の前に置く。

「…あの、鹿瀬さん、とかいう方は…？」

回りを見回して彼女が言う。

そう、事務所にはお茶を運ばせた後、忠と良平の世話をしにいった蘭丸の他に時人、千鶴、滋乃の三人しかいなかったのだ。

「いえ…、その…。今日はまだ見えてないんですよ」

余計なことを知らせない方がいいと思ったのか、時人はそう言ってお茶を濁した。

「…そうですね。ところで御神楽さん。妹はまだ見つかりませんか？」

「申し訳ありません。いや、我々も手は尽くしているのですが…」

「いえ、それは構いませんが…。それにしても本当に怖いですよね」「怖い？」

「ええ、こう立て続けに若い女性の失踪事件が起こるなんて…」

「…うん…、警察はどうも裏に何か組織のようなものがあるのではないか、と見てるんですが…」

「組織ですか？」

「はい。どうも大陸の方からそういった人身売買組織が来ているのではないかと、」

「いやですわ、そんなこと。もしそんな組織に妹や鹿瀬さんがつかまっていたらと思うと…」

「ええ。もしそうだとしても必ず妹さんは助けだしますよ」

「お願いします」

「…先生」

千鶴が話しかけた。

「なんですか？」

「古久保さんの妹さんもやはりその組織に…」

「うーん…、まだ何とも言えませんがね。しかし鹿瀬君が居なくなつたことと今回の事件に何か関係があるとしたら…」

「じゃあ…」

「とにかく、諸星警部には伝えておきましょう」

と、時人が言った時だった。

「誰かおりませんか？」

と、一人の僧衣を身にまとった老人が事務所に入ってきた。

「やれやれ、今日はお客さんがよく来ますね」

そう言いながら時人は出迎えた。

「あ、無明住職」

「お久しぶりです、御神楽先生」

そう、その僧侶とは時人が新潟の比翼荘で起きた連続殺人事件や幣原家の殺人事件を解決した際に世話になった塚原浄光寺の無明住職だったのだ。

「こちらこそお久しぶりです。…それで何の御用時で？」

「いえ、古い友人を訪ねに東京に来たので、ついでに寄ってみたんじゃないか…。いかがですか？」

「いえ、相変わらず忙しくて」

「…？　ところで鹿瀬とか言う娘さんは？」

無明住職も巴がないことに気がついたようだ。余計な心配をさせてはいけないと時人は思ったのか、

「い…、いえ、今日は一寸用事があるとかでこっちは来てないんですよ」

「そうですか」

そして無明住職は中に入った。

そして来客用ソファに招き入れる。

「あ、お茶を淹れてきます」

千鶴が立ち上がると厨房に入ってしまった。

「いえ、お構いなく」

無明住職はそういうと何気なく辺りを見回す。と、

「なんですか、これは？」

無明住職は机の上に置いてある紙に気がついたようだ。

「い、いえ、その…、これは…」  
無明住職はじつとそれを見ていたが、  
「…?」

その様子にただならぬものを感じ取った時人は、

「どうしました、住職?」

「いえ…、何だか我々が使っている符丁に似てるな、という感じが  
まして」

「フチヨウ?」

「ええ。我々もこういう仕事ですからな。我々の間でしか通用しな  
い符丁というのがあるんですわ。例えばですな…」

そう言つと無明住職は紙と鉛筆を取り出すと、

大無人 立無一 木無十

と書いた。

「これは…?」

「我々が数を表すときに使う言葉です。これがどのような数字を現  
すか先生ならわかりますな?」

そう言われた時人はじつと見ていたが、

「そうか、一、六、八を示してますね」

「さすがですな、その通りです」

「…どういふことですか?」

千鶴が聞いた。

「簡単ですよ。『大無人』とは『大』という字から『人』が無い、  
という意味です。『大』という字から『人』を無くすと『一』が残  
るでしょう? それと同じように『立無一』は『立』から『一』を  
無くすと『六』が残り、『木』から『十』を無くすと『八』が残る、  
とこういふわけなんですが…」

と、そこまで言いかけた時人が何かに気がついたようだ。

「…まさか…!」

「どうしたんですの、時人様？」

しかし、時人は滋乃の言葉も耳に入らないようだ。

例の写しの紙をじっと見ると、もう一枚紙を取り出し、鉛筆でなにやら書き始めた。

それを見ていた無明住職は、

「どうやら先生は何かに気がついたようですな。…となると年寄り  
が居ても無駄なようですな。それでは失礼します」

「あ、お気をつけて」

そして無明住職は事務所を出て行った。

それから2、3分経った頃、

「できた…」

そう呟くと鉛筆を置いた。

「…あれ、無明住職はどうしました？」

時人はようやく無明住職が居なくなったのに気づいたようだ。

「つい先ほど帰りましたよ」

「あ、そうだったんですか。なんか悪いことしましたね…」

「それよりどうかしたんですか？」

「ええ。これを見てください」

と時人が一枚の紙を見せた。そこには、

十日夜九時横浜港停泊中白龍丸内

と書かれていた。

「…十日夜九時横浜港停泊中白龍丸内？」

「何ですの、これは？」

「間違いないです。これは彼らが用いていた暗号文です」

「暗号文？」

「はい、無明住職の一言がヒントになりましたよ。『王除二』と言  
うのは『王』という字から『二』を取り除くことだったんです。そ

うすれば『十』という字が残りますよね？ 同じように『明除月』は『明』という字から『月』を除くと『日』が残ります」

「じゃあこの『液除水』というのはなんですか？ 『液』という字に『水』はありませんけど」

「それはあとで説明させてください。さて、その次の『丸除点』というのは『丸』という字から『点』つまり『丶』を除くと『九』という字になり、その次の『寺加日』というのは『寺』という字に『日』という文字を加える、という意味だったんですよ。そうすれば出来るのは『時』だったんですよ。さて、ここで桧垣君の言った『液除水』ですが、『水』というのはサンズイのことですよ」

「…そういえばサンズイには『水』という意味があるんでしたわね」  
「はい。ですから『液』という字から『水』つまりサンズイを除けば夜、という字が出来ますからね。同じように『亭加人』というのには『亭』という字に『人』つまり人偏を加える、という意味だったんですよ。ここまですればあとは簡単です。この解法に沿っていけば『十日夜九時横浜港停泊中白龍丸内』という文章が出来るんです。一寸気をつけなければいけないのは最後の『肉除人』ですけど、まあ、これは文章の流れから考えると『肉』という字から『人』という字を除いて『内』という字にするのは容易に想像は出来ますがね」  
「じゃあ先生。鹿瀬さんは…」

「はい。恐らく僕より先にこの暗号を解いたんです。そして単独行動に出た結果、組織に捕まったのかもしれないね…」

「でも、何で巴さんは…」

「…お姉さんの存在ですよ」

「鹿瀬さんのお姉様？」

「はい。おそらく鹿瀬くんのお姉さんも行方不明となっておりますからね。もしかしたら例の暗号文を解いたことで、彼女はそういった組織と鹿瀬君のお姉さんを始めとした女性達の失踪が関連があるのではないか、と思ったんでしょうか？ そして姉思いの鹿瀬君は我々に黙って単独行動を取った…」

「そんな…」

「確かに鹿瀬君の取った行動はほめられたものではありませんが、なんとなく気持ちはわかりますね」

「…巴おねえちゃんも居なくなつたの？」

玄関の方で声がした。

その声に振り向く3人。

見るとそこには外へ遊びに行っていたはずの蘭丸と巴の弟達が立っていたのだ。

「…いつ帰ってきたんですか？」

時人が聞く。

「ついさつきです。すみません、先生。ボクは黙ってたんですけど、今二人に話し声が聞こえたらしくして…」

蘭丸が言う。

「そうですね…、迂闊でしたね…」

「ねえ、先生。巴お姉ちゃんどうしたの？」

「忠君、良平君。心配しないで。巴さん、きつとお姉さん探しに行つたのよ」

「光枝おねえちゃんを？」

「うん。でも心配しないで。お姉ちゃんたちも一緒に巴さんたちを探してあげるから」

「でも…」

「お願い。今は私達を信じて」

「そつだよ、先生ならきつと巴さんたちを見つけ出してくれるから  
蘭丸も言う。

「う…、うん」

「よし、いい子だね」

「ところで十日といつたら…」

「明後日ですよ！」

「とにかく時間がありません！ 諸星警部達にも連絡をしないと！」

連続女性失踪事件

(第4話へ続く)

(第3話) (後書き)

(作者より)この作品は作者の開設している「ともゆきのホームページ」が「小説家になろう」のNW・SYSTEMを使って掲載しています。採点システムは採用していません。

この作品の感想等は「ともゆきのホームページ」のBBSの方にお願ひします。

(第4話)

10月9日、巴が行方不明になって2日目の朝。

「これから所員だけで話したいことがある」としばらく忠と良平の二人の世話を見てもらうように美和に頼んだ時人は千鶴、滋乃、そして蘭丸の3人を事務所に集めた。

巴が行方不明になった、と言うことで眠れぬ夜を過ごしたのか、どの顔も憔悴しきっている表情だった。

「…鹿瀬さん、大丈夫でしょうか？」

千鶴が呟いた。

「…きつと大丈夫です。とにかく、今は鹿瀬君が無事なことを信じるしかないでしょうね」

時人が言う。

その時だった。

「よお、先生」

諸星警部が事務所に入ってきた。

「あ、警部。…どうですか、あれから？」

そう、時人は諸星警部に頼んで巴の搜索を依頼していたのだ。

「うーん…、こっちも必死になって探してるんだがなあ…。ただな、昨日の夜に横浜へ向かう汽車の中に鹿瀬のお嬢ちゃんらしい人物が乗っていた、という証言が取れたんだ」

「…じゃあ、鹿瀬君はやはり…」

「…おそらくな。その、先生が解いた暗号のとおりには横浜港へ行っただろうな。ただ時間が時間だけに、横浜港周辺でお嬢ちゃんを見かけた、という証言がないんだ」

「じゃあ、鹿瀬君は…」

「ああ。横浜港に停泊しているという白龍丸のところに向かったの

は確実だろうが、それ以降の足取りがつかめてねえんだ」

「じゃあ、鹿瀬君はおそらくその前後で…」

「かもしれないな」

そのとき、不意に事務所の扉が開いた。

「…やはりここにいたんですか」

栗山刑事が探偵事務所に入ってきた。

「どうした、栗山？」

諸星警部が栗山刑事に聞いた。

「いや、大変なことがわかって…」

「大変なことだと？」

「先ほど神奈川県警から連絡があつて、昨夜横浜で酒に酔つて暴れていた男を取り押さえて調べていた所、例の失踪事件で行方不明になつていた女性の写真を何枚か持っていた、と言つんですよ」

「何だと？」

「県警によると、今朝から横浜署のほうで男の取調べをしているらしいんですが、おそらく今回の事件に何か関係があるのではないかと」

「…どうやら今回の事件、この間諸星警部が言ったように背後でなにやら組織が動いているようですね」

「そのようだな。…確か先生が解読した暗号によると10日の夜9時に白龍丸で何かあるようなんだな」

「はい」

「…なんとかそれまでに解決できればいいが…」

「それから警部。ちょっと気になることがあつて」

「気になること？」

「例の白龍丸ですが…。11日の朝早くに横浜港を出港して、香港に向かうことになっているそうです」

「香港だと？」

「…だとしたら急がないと…」

時人が言う。

「あ、ああ、そうだな。公海に出られたらもうオレたち日本の警察じゃどうしようもなくなる」

「それに公海上で取引なんかされたら我々も手の打ち用がありません」

「そうだな。それで香港の警察に協力を頼むにしても…」

「おそらく時間が掛かるでしょう。その間に鹿瀬君たちが…」

「…わかってる。いまから礼状を取って白龍丸を徹底的に搜索する。

栗山！ 神奈川県警に連絡を取れ！」

「はい！」

そして栗山刑事が出て行った。

「じゃ、先生。オレも警視庁に戻るからよ」

「はい、わかりました」

諸星警部が出て行くと事務所はしんとしてしまった。

やはりどこかで巴がない、ということが今ここにいる所員たちにも何らかの影響を与えているのであろうか。

「…先生」

千鶴が話しかける。

「…ん？ あ、ど、どうしました？」

「どうした、じゃありませんわよ。先程から時人様、桧垣さんやわたくしが話しかけても何も聞いてないように見受けられますし…」

「あ、す、すみません。考え事をしていましたもので」

「…巴さんのことですか？」

「ほんとですわね。…鹿瀬さん、大丈夫なのかしら？」

「…大丈夫、きっと鹿瀬君は大丈夫ですよ」

時人のその言い方は二人に話しかける、というよりは自分に言い聞かせているように思えた。

「…さて、我々もこうしてはいられないようですね」

そういうと時人は立ち上がった。

「先生、今から何をするんですか？」  
千鶴が聞く。

「…我々も横浜に行きましょう！」  
「横浜に…、ですか？」

「ええ、こうしてじっと待っていたって情報はやってきませんからね。今回の事件に関するどんな小さな情報でも掴まなければいけません。今回の事件の鍵は横浜にあると思います。ですから今から行きましょう！」

そして時人は蘭丸に後のことを任せると千鶴と滋乃と共に横浜へと向かった。

\*

横浜港。

時人たち3人が到着すると、諸星警部が時人を出迎えた。

「よ、先生。待ってたぜ」

「待っていた？」

滋乃が聞く。

「あ、さっき諸星警部に連絡をしておいたんですよ。…それで、どうなんですか？」

「ま、とにかく来いよ」

そう言つと諸星警部は時人たちを近くの旅館に招き入れた。

聞くと、諸星警部たちが臨時の捜査本部に使っている、ということだった。

「…それで、白龍丸のほうはどうなんですか？」

時人が諸星警部に聞いた。

「ああ。今神奈川県警と協力して中の捜索を始めた所だ。よかつたら先生も見えてみるか？」

「あ、お願いします」

そして時人たちは諸星警部の案内で白龍丸に向かった。

白龍丸の出入り口に栗山刑事が立っていた。

彼は諸星警部たちを見つけると階段を降りて下にやって来た。

「あ、先生も来てたんですか」

「…それでどうだったんだ？」

諸星警部が聞く。

「いやあ、弱りましたねえ」

「どうしたんだ？」

「実はあの後礼状を持って白龍丸内を搜索したんですが、船内にはこれといった手懸りがなかったんですよ」

「手懸りがない？」

「ええ。白龍丸の船員達に彼女の写真を見せて聞いたんですが、そんな子はここで見かけていない、って言うし…」

「…まあ、そう言うだろうな」

諸星警部が吐き捨てるように言う。

「それで白龍丸を隅々まで調べてみたんですが、さっきも言ったとおりこれといったものは見つからなかったし…」

「…やっぱり…」

それを聞いて時人が呟いた。

「やっぱり、って…何がやっぱりなんですか？」

「いえ…、そのくらいのこととは相手も計算に入れていると思いますよ。少しでも怪しいものが見つかったらこの計画はオジャンになりますからね」

「じゃあ先生…」

「ええ。おそらく女性達は　もちろんその中には鹿瀬君もいるのでしょうが　別の所で監禁されていると思いますよ」

「成程、そう簡単には尻尾を掴ませない、ということか…」

「…それで警部…」

「心配するな。神奈川県警の方には周辺の搜索も依頼して、何かあったら連絡するようには頼んでいるし、オレ達もこれからここにいくからな」

「そうですか」

「…なんなら先生も一緒にいるか？」

「え、いいんですか？」

「心配するな。部屋は取っておいてもらうから」

\*

そして時人は事務所にいる蘭丸に「今夜は泊まりになる」と連絡を入れ、美和の方にも蘭丸たちの世話を頼むと再び諸星警部たちの捜査に合流した。

そして旅館の一室を借り切って捜査会議が開かれることになり、諸星警部は時人にどうしても出て欲しい」と頼み込まれ、さすがの時人も断ることが出来ず、捜査会議に出席することにした。

そして捜査会議が始まる部屋に移動しようとした時だった。

旅館の従業員であるう人物が時人に近づいて来た。

「…あの、御神楽様ですか？」

「…あ、そうですか」

時人が言つと、

「お電話が入っておりますが」

「え？ 僕にですか」

「はい、お電話替わりました。…あ、蘭丸君」

「どうやら電話の相手は蘭丸のようだった。」

「…え？ そうですか。…はい、はい、わかりました。じゃ、こちらに来るように言っておいてください。お願いしますよ」

そして電話を切る時人。

「…蘭丸君、なんて言ってたんですか？」

「いつの間にか千鶴と滋乃の二人が来ていて時人に聞いた。」

「ええ、何でも古久保さんが事務所のほうに見えたらいいですよ」

「ああ、古久保さんが…」

「それで蘭丸君に彼女にこちらへ来るように伝えておいたんですよ。後1時間も掛からずにこっちに来ると思いますよ」

「そうですか」

「それじゃ、僕は彼女が来るまで捜査会議に出席してるんで久御山君と松垣君は先ほどお願いしたように周辺の聞き込み捜査をしてくださいね」

「はい」

そして二人は旅館を出て行った。

それから1時間ほど経って古久保幸子が時人の元にやって来た。

「やあ、古久保さん」

そう言って時人が出迎える。

「お忙しい中すみません」

「いえいえ、こちらこそ。…立ち話もなんですから…、あそこに行きましょう」

と、時人は旅館の前にある甘味処を指差した。

「そういえば古久保さん。妹さんの件ですけど」

「…あれからどうなっただんでしょうか？」

「ええ、余り詳しいことはいえないのですがもうすぐ解決すると思いますよ」

「そうですね。…でも、御神楽さん。何故横浜なんかに？」

「どうもこの辺に事件解決の手懸りがあるそうでした。私の知り合いの刑事もここに来てるんですよ」

「…そうですね。何か手懸りが見つかるといいですね」

「大丈夫ですよ。警察は今それを捜しているし、我々もいま捜している所なんですから」

「…でもそれまでに妹の身に何かあったらと思うと…。妹や鹿瀬さんが売られたりしないか、と心配で…」

「…まあ、それほど心配しないでいいですよ。もうすぐ事件は解決

すると思います」

「…それじゃ、また何うと思えますので」

そういうと古久保幸子は立ち上がった。

「はい、そのときはまた」

時人がそう言うのと古久保幸子は店を出て行った。

時人はそれをじっと見続けていた。

そして既にぬるくなった緑茶をひと口飲んだ時だった。

「先生、ここにいたんですか？」

千鶴の声がした。

「…どうしたんですか、桧垣君」

「ちよつと来ていただけませんか？」

そして千鶴の案内で時人が来たのは倉庫街だった。

滋乃と何人かの警官が立っている。

「時人様、お待ちしておりましたわ」

「…一体ここがどうしたんですか？」

「いえ、何だか怪しい気がして…」

見ると「立入禁止」の立て札がある。

「…ここに巴さんたちが監禁されているんじゃないか、と思って…」

「ここは調べてみたんですか？」

時人が滋乃の傍にいた警官に聞く。

「一応調べはしたんですが、一ヶ所だけ鍵が掛かってた所があつて

…」

「そこだけ調べていない、というわけですね」

「…はい」

「…わかりました。諸星警部を呼んできますので一寸待っていてください」

やがて時人が諸星警部と栗山刑事を連れて戻って来た。

そして警官の案内でその鍵が掛かっている倉庫にやって来た。

「…ここか…」

諸星警部がノブをひねる。警官の言う通り鍵が掛かっていた。

「…どうしますか？」

栗山刑事が聞く。

「仕方ねえ、ぶち破るか」

「久御山君、桧垣君、下がっててください」

時人は滋乃たちにそう命じると男達がドアに向かって体当たりを始めた。

何回か繰り返しているうちに蝶番が壊れたか、ドアがぶち破られる。

そして中に入る一同。

あたりは何もなかった。

「…誰もいませんね…」

千鶴が言う。

「…やっぱり女性達がここに監禁されていた、というのは考えすぎだったんじゃないのか？」

栗山刑事が言う。が、

「…いや、そうとも言い切れませんよ」

時人の声が出た。

「…どうということだ？」

諸星警部が聞いた。

「ちよつと来てください」

そして時人がそこにいた一同を呼ぶ。

「どうしたんだ？」

「これを見てください」

そして時人が指を指す。

床は何かで拭いたかのように綺麗になっていたのだった。

「…床がどうかしたのか？」

「この床が何かで拭き取ったかのように綺麗になっている、という

ことは、ここに誰かいた、ということになりますよ」

「…じゃあ先生…」

「…断定は出来ませんが、桧垣君の言うとおり連れ去られた女性達  
がここに監禁されていた可能性がありますね」

「…じゃあ、先生」

「…はい。彼女達はどこかに連れ去られたのかもしれませんがね」

「もし、そうだとしたら、彼女たちは何処へ行ったんだ？」

「…さあ、それがわかればいいんですが…。とにかく時間がありませんね」

(最終話に続く)

(第4話) (後書き)

(作者より)この作品は作者の開設している「ともゆきのホームページ」が「小説家になろう」のNW・SYSTEMを使って掲載していますが、「採点システム」は採用していません。

この作品の感想等は「ともゆきのホームページ」のBBSの方にお願ひします。

(最終話)

10月10日。

朝起きて、蘭丸と美和に連絡を入れた時人は千鶴と滋乃と共に再び捜査に出かけた。

諸星警部達もまた時人とは別に捜査を進めているのだが、横浜港の中ではそれらしい女性を見かけた、と言う情報は一つも入ってこなかった。

「…一体どうしたんでしょうか…」

ある棧橋で諸星警部と会った時人は諸星警部からの情報を聞いて呟いた。

「コレだけ探しても見つからねえ、つてのは確かにおかしいな…」

「でもあの倉庫の様子から言って女性達がこのあたりで監禁されていた、と言うのは間違いがないようですし…」

「…もうどこかに連れて行かれたんじゃないかな」

「…まさか、あの暗号文によると、取引は今日のはずでしょう？」

急に変更となると組織の方だっているいと混乱があるでしょうし

…」

その時、不意に汽笛が聞こえてきた。

みると沖のほうから一隻の小さな客船が棧橋に向かってくるのが見えた。

「…あれは？」

時人が丁度そこにいた港湾事務所の職員に聞いた。と、

「ああ、あれですか。伊豆諸島に行ってた船が帰ってきたようです  
ね」

「伊豆諸島？」

「ええ、一泊二日の観光とかで昨日の朝から出てたんですよ」

「昨日の朝から…」

そう言った時人はじつとその船を見ていた。

その時だった。

「まさか！」

時人の脳裏にある考えが浮かんだ。

「久御山君、桧垣君。君達はここにいてください」

「何処に行くんですか？」

「すぐに戻りますよ！」

そう言って時人は港湾事務所のある建物に向かって走っていった。

程なく諸星警部と栗山刑事を連れて時人が戻ってきた。

後ろには警官隊もいる。

「…先生、一体どうしたんだよ？ いきなりあの船を調べてくれ、  
って」

そういつと諸星警部は今まさに入港しようとしている船を指差して言った。

「いえ、もしかしたらあの船の中にももしかしたら行方不明になっている女性達がいるのではないかと思って」

「それは本当か？」

「いえ、あくまでも可能性の話です。…鹿瀬君がああ暗号を解いた、  
と言うことや美和さんの時に組織の人物が逮捕された、と言うのは  
おそらく組織の方にも情報は入っていると思います。となると警察  
の方にも情報が行っていると考えるのが妥当ですから…」

「成程、オレたちの目を欺くために白龍丸はわざと空っぽにして女  
性達を別の船に移して、とこういうわけか」

「はい。海の上じゃ我々もどうしようもないですし、昨日の朝から  
出港していた、と言うのも何か臭うし…」

「ま、とにかく調べてみる価値はありそうだな」

やがて客船が入港してきた。

船の中から二人の男が出てきた。

諸星警部が男達に近付く。

「失礼だが」

「…何の用ですか？」

「警察のものだ。何でもこの船で密輸が行われていると言っている情報が入ったんだ。船内を調べさせてもらってもいいか？」

「…うっ…」

「…どうした？ 何か見せたくねえ物でもあるのか？」

「どうやら時人の考えが当たったようだった。」

「…と不意に、」

「この野郎！」

男が諸星警部に襲い掛かった。

しかし諸星警部は男達を問題にせずあつという間に組み伏せてしまった。

「…連れて行け！」

諸星警部が警官に命じると、4人の警官が男達を港湾事務所のほうに連れて行った。

「先生、先生はここにいてくれ」

「…強制捜査ですね」

「ああ」

そして諸星警部は背広の中から拳銃を取り出す。

栗山刑事もそれに倣って拳銃を取り出した。

「…よし、栗山、行くぞ！」

「はい！」

そして拳銃を構えると諸星警部たちは船の中に突入して行った。

船の中には何人かの男達がいた。

その男達はいきなり闖入してきた警部たちに驚いたようだ。

「動くな、警察だ！」

諸星警部が叫ぶ。

…と、一人の男が拳銃を取り出そうと身構えた。

それを見た栗山刑事が男に飛び掛り、今まさに拳銃をしようとしたりした男の手首に手刀を落とすと、あっという間に組み伏せてしまった。

…おら、無駄な抵抗はやめるんだな！」

そして男達が次々と連行されていくのを確認した諸星警部は船内を搜索した。程なく、

「警部！」

栗山刑事の声がした。

「どうした？」

「この船室に鍵が掛かっています！」

見るとある船室のドアに南京錠がぶら下がっていたのだ。

…栗山、一寸下がってろ！」

「はい！」

そして諸星警部は拳銃を取り出すと銃の台尻で思い切り南京錠を殴りつけた。

2、3発殴りつけると南京錠が壊れ、ドアが開いた。

中には4～5人の女性が船内にいた。

…あなたは？」

一人の女性が聞く。

「我々は警察のものです。もう安心です！」

諸星警部が言うと、女性達が安堵の表情を浮かべた。

「栗山、他にもこのような部屋があるかどうか手分けして探せ！」

「わかりました！」

そして警官隊はあちこちの船室を搜索し、次々と女性達を解放していった。

時人たちに「女性達を解放した」と言う情報が伝えられたのはそれから間もなくのことだった。

「そうですね、それはよかったですね」

「ま、詳しいことはこれから調べるが、とりあえず一安心して所だな。一寸まだやることがあるから先生は先に帰っててくれねえか？」  
「わかりました」

\*

そして女性達は臨時の捜査本部がある旅館に連れて行かれ、身元の確認を受けた。

女性達の中には巴たちがビルディングで見つけたアルバムにあった写真の中の女性が何人も含まれていた。

そして捜査本部は身元がわかった女性の身内への電話などにかき慌しくなり、時人たちも手伝いに借り出される羽目になってしまった。

「はい、そういうことですので娘さんは無事です。ですので警視庁までお越し願えますか？」  
「はい、わかりました。どうも済みませんでした」

そして時人は電話を切り、ホッと一息ついたときだった。

「あの、もしかして御神楽時人さん、って方でしょうか？」

時人に一人の女性が時人に話しかけてきた。

「…？ あなたは？」

「私、鹿瀬光枝と言います」

「鹿瀬：光枝？ もしかして…」

「はい、鹿瀬巴の姉です」

確かによく見ると、姉妹と言うこともあるのだろうか何処となく巴に似ている。

「それで、巴は見つかったんですか？」

「どういうことですか？」

「いえ…、おととい、船の中に連れ込まれた女性の中に巴がいて…」

やはり巴は組織につかまっていたのだ。

「それでどうなったんですか？」

「…いえ、巴のほうも私に気づいたようで『お姉ちゃん!』と叫んだんですけど、それきりどこかへ連れて行かれて…」  
その時だった。

「先生!」

諸星警部が時人の下に来た。

「どうしたんですか、警部?」

「それがな…、鹿瀬のお嬢ちゃんがいねえんだよ!」

「巴さんがいない?」

「どういうことですか?」

「いや、女性達を調べてみたんだが、その中に鹿瀬のお嬢ちゃんの姿がなくてよ。一応女性達にもお嬢ちゃんの写真を見せて聞いてみたんだが…。何人かはお嬢ちゃんの姿を見た、という証言が取れたんだが、どうも、あの船には乗ってなかったらしいんだ」

「…そうですか」

と、時人は不意に何かを思い出したように、

「あ、そういえば、警部。この人が鹿瀬君のお姉さんですよ」

と諸星警部に鹿瀬光枝を紹介した。

「あんたがその鹿瀬光枝、って人か。…あ、申し遅れました、警視庁の諸星です。貴女の妹から捜索願が出てましたよ」

「…お姉さん。諸星警部にも僕に話したことを話してもらえませんか?」

そして光枝は時人に話したことを諸星警部にも話した。

「…うーん…」

話を聞いた諸星警部は考え込んでしまった。

「…もしかしたら、まだ裏で誰かがいるようだな」

「誰かがいる?」

「ああ。今栗山が調べてるんだがな、どうもこの事件まだ捕まってるねえヤツがいるようだ」

「捕まっていないヤツ、といますと?」

「この組織の首領、つまり元締めだな」

「首領ですか？」

「ああ。オレたちが捕まえた連中はどうも部下らしくて、まだその首領と何人かの部下が捕まってねえらしいんだ」

「…待てよ…」

不意に時人の頭の中に何か考えが浮かんだようだ。

「…？ どうしたんだ、先生？」

「…だとしたら、この事件は…」

\*

10月となると日が暮れるのも早い。

夕方も5時だと言うのに辺りは夕暮れが迫っていた。

時人は横浜港のある埠頭に立っていた。

…と、向こうから一人の人物が時人に向かって歩いてきた。

「お待ちしておりました、古久保さん」

そう、その人物とは古久保幸子だったのだ。

「私をこんなところに呼び出して何か御用ですか？ 事件が解決した、とでも仰るのですか？」

「ええ、解決しましたよ、古久保さん。…いえ、人身売買組織の首領さんと申し上げた方がいいですか？」

時人の思わぬ発言にそこにいた一同が「え？」と言う表情をする。

「…な、何をおっしゃるんですか、御神楽さん。私は妹を何者かに攫われたんですよ」

「いえ、それは貴女が僕に近付くための嘘ですよ」

「わ…、私が嘘を付いている、と言うなら何か証拠があるんですか？」

「ええ、証拠ならありますよ。あなたが不用意に言った一言が、僕に貴女を疑わせるきっかけとなったんですよ」

「一言ですって？」

「ええ、あれは鹿瀬君が行方不明になった、と僕達が知った日のこ

とでしたが…。貴女は確かその日に僕の事務所に来て来ましたよね？」

「それがどうかしましたか？」

「その時貴女は鹿瀬君が事務所に来ていないのを見て鹿瀬君はどうしたのかと聞いた時、僕はこう答えました。『今日はまだ見えていない』とでもその直後貴女はこう言っていましたよね？ 『そんな組織に妹や鹿瀬さんがつかまっていたらと思うと…』って。普通だったら遅刻している、とか風邪か何かをひいているのではないか、と思うはずなのに何故そういった発想が出てくるんですか？」

「そ…、それはその…、そういった事件が相次いで起こっているから心配で…」

「僕は依頼人に余計な不安を与えてはいけないと思って、あなたに今回に事件の背後に人身売買組織が潜んでいる、とかそういったことは一言も言ってませんよ。…その瞬間、僕はあなたに疑惑を持ちました。それにその後、貴女はもう一度同じようなミスを犯してます」

「同じようなミス？」

「昨日横浜で会った時、貴女は僕にこう言っていましたよね？ 『妹や鹿瀬さんが売られたりしないか、と心配で』とも。さつきも言った通り、僕は貴女に今回の事件の背後関係については何も言ってませんよ。それなのに何故そういった組織のことを知っているんですか？」

「……」

「そして先ほど、諸星警部に連絡がありましたよ。昼に捕まえた男が全て自白したそうです。全て首領の命じたとおりにやった、とね。そして、その首領が貴女だった、ともね。…それを聞くまで僕もまさか組織の首領が女性だとは思いませんでしたが」

「……」

「今回の事件、貴女の目的はあちらこちらからモデルの紹介を装って女性達を誘拐して香港とかそう言った所にある闇の組織に売るこ

とだった。しかし貴女はどこかで僕の存在を知ったんでしょうね？  
今回の目的を成功させるためには僕の存在は邪魔だった。そこで貴女は組織の首領ということを隠して、『妹が行方不明になった』と言う話をでっち上げ、僕に近付いた。そして僕がどのような行動を取るか監視していたんですよ。…おかげで僕達はいつもの裏をかかれていた。貴女が情報を部下に流していましたからね。あの船の件だってそうです。お姉さん思いの鹿瀬君がお姉さんを助けようと独断で忍び込んで貴女方に捕らえられたとき、貴女はおそらく自分達の情報が警察や僕たちに漏れた、と考えたのでしょう。そこで貴女は別の方法を考えた。我々が白龍丸を捜索するのを見越して、10日の夜の取引の場所を変更したんです」

「変更ですって？」

「ええ、あの伊豆諸島へ行っていた、と言う遊覧船ですよ。白龍丸にはもう警察の手が回っている。だから別の場所、つまりあの遊覧船の中で行なおう、とそう考えていたのではないですか？そこで貴女方は我々の目を欺くために女性達を監禁していた倉庫から遊覧船に乗せて伊豆諸島のほうまで一時的に連行したのでしょうか。海の上だったら我々も手の出しようがないですからね。…さあ、どうですか？ まだ何か言うことはありますか？」

「…そこまで見破ってたのね、流石だわ、探偵さん」

そう言うといきなり古久保幸子は拳銃を取り出した。

「な、何をするんですか！」

「おとなしくしなさい！ あれが見えないかしら？」

そういうと古久保幸子は拳銃を船の方に向ける。

「…！」

そう、船の上には後ろ手に縛られた巴が立っていたのだ。

そして巴の周りには男が取り囲んで巴に拳銃を突きつけていた。

「…鹿瀬さん！」

滋乃の絶叫が響く。

巴も時人たちに気がついたようで、

「先生！」

「さ、あの子の命が惜しかったら無駄な抵抗はやめなさい」

「…それはこっちの台詞ですよ」

古久保幸子の背中で声がした。

その声に後ろを振り向く古久保幸子。

「諸星警部！」

そう、諸星警部が古久保幸子の背後に立っていて拳銃を向けていたのだ。

「女に拳銃を向けるのは好きじゃないんだがな。先生やお嬢ちゃんたちになんかしてみろ。オレが許さねえからな！」

その時だった。

「警部、船の方は制圧しました！」

栗山刑事が甲板に立って手を振っていた。

「それから先生、鹿瀬も無事ですよ！」

栗山刑事の隣には解放された巴が立っていた。

それを見た時人は、

「ありがとうございます！…さて、どうしますか？ 女首領さん」

「…わ、わかったわ。降参するわよ」

そう言つと古久保幸子は拳銃を地面に置いて両手を挙げた。

\*

やがて諸星警部たちの手によって古久保幸子をはじめとする組織の面々が連行されていった。

女性達も一旦警視庁に連れて行かれ、事情聴取をされた後に帰されることになった。

勿論その中に鹿瀬光枝もいて、彼女もわざわざ東京まで依頼に来た第二人とともに長野に帰ることになった。

\*

翌日の上野駅。

既にホームには列車が入線していた。

その列車には鹿瀬光枝と忠、良平の姉弟が乗っていた。

窓の外では巴、千鶴、滋乃の3人が見送りに来ていた。

「…巴、本当にゴメンね。巴だけじゃなく他の人にまで迷惑をかけた…」

光枝が巴に向かって言う。

「いいんだってば、お姉ちゃん。これが私達の仕事だもん」

「…久御山さん、桧垣さん。本当に弟達が世話になりました」

「ええ。先生に伝えておきます」

「どうもすみません」

「それにしても…。忠、良平。今度は黙って家を出てきたりしちゃ駄目だからね！」

「わかったよ」

「それからお姉ちゃんも、何か上手い話には必ず裏があるんだから引っこかかったりしちゃ駄目よ」

「わかってるわよ」

そうこうしている内に発車のベルがホームに響き、程なく汽笛を挙げて光枝たちの乗った列車は走り出した。

「じゃあーねー、おねーちゃん！」

巴が手を振る。

「また来てくださいねー！」

「お待ちしておりますわ！」

千鶴と滋乃も手を振っていた。

そして列車はあっという間に見えなくなってしまう、長野のほうへと向かっていった。

「…行っちゃった…」

巴は大きいため息をつく、列車の去っていった方向を見つめていた。

「…でも、きょうだい、っていいですね」

千鶴が言う。

「そうですね。あのような御きょうだいが居られて鹿瀬さんは幸せ者かもしれませんわね」

滋乃も言う。

それを聞いた巴は軽くうなずくと二人に向かって、

「さ、帰ろうか」

一つの事件が終わって安心したか、巴が笑顔を見せた。

(終わり)

（最終話）（後書き）

作者より…この作品を書くに当たり、グループ・コロンブス編『知ってなるほど！面白トリビア《漢字編》』（主婦と生活社）を参考にしました。

また、この作品は作者の開設している「ともゆきのホームページ」が「小説家になろう」のNW-SYSTEMを使って掲載していますが、「採点システム」は採用していません。

この作品の感想等は「ともゆきのホームページ」のBBSの方にお願います。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0039a/>

---

連続女性失踪事件

2008年11月7日06時30分発行